

平成28年度 総会開催 規約により理事長が交代

平成28年度総会が1月10日、ホテル大阪ベイタワーで開催され、全国各地から役員、会員計177人が参加した。

全国から会員が参集した総会



日本篆刻家協会会報

第16号 平成28年3月1日発行
発行：日本篆刻家協会
563-0032 池田市石橋2-2-10-203
TEL 072-760-3852 FAX 072-760-3853
E-mail: info@n-tenkoku.jp
http://www.n-tenkoku.jp

総会に先立ち開催された理事会



日本篆刻家協会規約第一〇条の規定により尾崎蒼石理事長は任期満了となり、後任に井谷五雲氏を第四代理事長として決定した。尾崎理事長は山下前理事長の後を受け、二期四年理事長を務め、国内外の篆刻家との交流をはじめ数々の実績を残し、協会運営に寄与した。規約により常任顧問に昇格する。午後二時三十分からの総会は、尾

生篆刻作品展要項等が協議された。

総会に引き続き新年懇親会が開催された。新理事長挨拶で開幕し、松本雅至常務理事の司会で進められた。新役員の紹介と決意表明があり、新理事長のもと、一致団結して事業、研究に取り組んでいくことの確認ができた。和気藹々と交流を深めていき、平田蘭石副理事長の挨拶で幕を閉じた。

崎理事長が議長を務め議事が進められた。平成二十七年事業報告、同決算報告、同会計監査報告、平成二十八年事業計画案、同予算案、協会規約の一部改訂が提案されいづれも原案通り承認決定された。また別表のとおり役員が承認された。なお本年度日本篆刻展は兵庫県立美術館王子分館原田の森ギャラリーが耐震工事のため兵庫県立美術館本館で開催される。

総会に先立ち企画委員会、午後一時からは理事会が開かれ、総会準備とともに第三一回展審査員、平成二十八年度実務機構業務分担、第三回小中学

右: 新年懇親会で挨拶する井谷五雲理事長
下: 新任の副理事長



第四代理事長に就任して

井谷五雲



この度、理事長に選任されました井谷五雲でございます。就任にあたり一言ご挨拶申し上げます。

本年、日本篆刻家協会は創立三十二年を迎えます。篆社会長の梅舒適先生が書壇の傘下から抜け出し、書壇の影響を受けない篆刻独自の研究団体が独自の公募展を開設し、中国に負けない篆刻界を創生することを標榜して、昭和六〇年（一九八五）に「第一回篆社全国展」を開催されました。その時の数字を挙げてみますと、役員・会員の出品数が三三九点、公募三七五点の計七十四点でした。その二年後、日本篆刻家協会が篆社を母体として誕生しました。昭和六十二年四月三〇日、奈良パークホテルにおいて設立総会が開催され、その場で会を「日本篆刻家協会」、展覧会を「日本篆刻展」と名称を決定し、初代理事長の座に梅舒適先生が座られたのです。ちょうど三〇年前のことです。その時の様子は昨日の事のようにも鮮明に脳裏に存在します。以後、山下方亭先生・尾崎蒼石先生とバトンが渡され、不肖私が理事長の要職を引き受けることになったのです。

さて、この三十二年の歴史。三十二年という歳月以上に実に様々な事柄が展開されてまいりました。

「日本篆刻展」

作品制作は勿論のこと、特別展観に関する研究・陳列・撤収の苦労や楽しさ。審査会の一喜一憂や緊張。前夜祭の打ち解けた和やかさ。表彰式や懇親会の盛大さ。周年行事の楽しさ。

「夏期特別研究会」

梅先生の講義、夜の余興大会、文玩品オークション。その後に組織替えされた中央研究会。外部講師の選定やその講演会。内部講師による実技指導や講話。分刻課題の制作や出来上がった印譜の鑑賞。

「海外交流」

本協会の重要な事業であることは言を俟たない。杭州の西泠印社や北京の芸術研究院は勿論のこと、中国全土の各省各主要都市、或は台湾の、書法家協会や印社との交流展覧会やシンポジウム。篆刻家の相互往来。訪中の度に経験する中国の歴史・風土・芸術文化・人々との感動的な出会い。魅力的な文物を手に入れたときの喜び。

その他、各地の印社主導による「地方展」、古河市の篆刻美術館での「役員展」、会報の出版や展覧会図録・協会設立三〇周年誌・篆刻印人・中国名家楹聯集・日中名家刻印選の発行等々、また関東の篆刻家との「東西印人交流」。枚挙にいとまがありません。

ここ数年は我々の前に、会員数の減少・展覧会出品者数の減少が問題として大きく立ちはだかっています。何とか策を講じなければならないと歴代理事長を中心に考えてきたところです。たしかに明確な目標と計画のもとに行動する必要と責任はあります。全ての篆刻愛好者の期待に応え、更に高みを目指す人の研究の支援をする任務を負っています。第一に我々一人ひとりが日々研鑽を積み重ねばなりません。が、私たちには長い間に築いてきた友情と信頼関係、篆刻や書に対する高い見識と技術、書壇や中国における実績、等々が存在します。幹部役員にとどまらず、会員一人ひとりが手を携えて努力してゆけば、それらの問題も解決の方向に向かうであろうことを確信しています。明確な指針を提示し、会員の皆様とともに努力したいと考えます。日本篆刻家協会と会員一人ひとりの更なる発展のために、微力ながら尽力することをお誓いして、理事長就任の挨拶といたします。

平成二十八年年度役員

【常任顧問】

尾崎蒼石 山下方亭

【理事長】

井谷五雲

【副理事長】

喜多芳邑

真鍋井蛙

【顧問】

市川兩僊

【代表理事】

伊藤雅夫

渡邊和琴

【名誉理事】

久米義山

保田昌石

【常務理事】

池田泥異

奥田晨生

熊本夕生

堤白遊

古溝幽畦

【参事】

師子堂房聚

【理事】

畔原裕美

射場少藍

大橋安泰

岸村爽風

後藤黄太郎

竹内立女

滑田寒鴉

平松晃一

松本岬風

米田黄苑

【参与】

会田慶子

石川思玄 植野無人 加藤静雲 白尾芳雲 多田学友 中田東光 服部九姚 藤田孝風 松本弘碩 森原晋作

稲葉竹葉 太田華香 金谷政治 小谷知洲 杉本素月 田中九成 西田茜秋 花村秀嶽 藤縄尚子 水上健治 山崎一雄

今西九郎 大槻彦裔 川西卯水 佐藤正明 関野羊越 田中瑞峰 西山進 林旦山 松阪聖岳 水巻游光 吉田宗里

上田静雲 垣内誠峯 倉野看雨 正和杏葉 高野弘深 丹下青風 橋本碧峰 樋口桃園 松田泰軒 森豊苑 渡部芳月

青木嘉代子 浅野春泉 池田蘆翠 伊藤錦汀 上松莊夢 岡上汀華 小國妙子 川崎白水 橘高香流 近藤胡蝶 静一華 鷹取千豊 千蔵天空 寺本翠葉 中島大夢 名倉克彦 島穆風 坂東香璋 古瀬章石 牧野象山 松田美津子 丸山沙舟 宮野宗雄 山田青溪 山本寿法 渡辺北舟

青木雄山 浅野祥雲 井後雅堂 伊藤淨齋 内田紅楓 岡田桂舟 桼野麗琴 川田紅溪 木本研塵 嵯峨洛山 淡谷春好 多田稔里 千葉晨翠 土井純司 永野久美子 西口青咲 畑間青露 廣田佳苑 堀口秀雄 増田繁治 松竹芳翠 水野和香 村田祥鳳 山村千秋 山谷加津子 横井青蓮

秋山捷華 浅野和泉 石留之然 伊藤梅香 内田真弓 尾川雅舟 片畑仁美 北田成磊 串田一逕 坂上香艸 嶋田杏園 巽聖石 寺田和仁 得永春水 仲森蓬園 庭田露舟 原田恵苑 藤川富美恵 藤村香代子 馬景泉 松田静石 松本清苑 宮越素翠 山口敦子 山本恵子 吉田雅風

浅野江涯 浅良朱華 石原雲木 今村重圃 梅原玉翠 小川匪石 加藤正順 北野河聲 小森香苑 阪口香雪 鈴木紀山 田中翠仙 寺田濤雲 戸出九廬 中山翔石 野中紫光 坂正步 藤村香代子 馬景泉 松田静石 松本清苑 宮越素翠 山口敦子 山本恵子 吉田雅風

青木嘉代子 浅野春泉 池田蘆翠 伊藤錦汀 上松莊夢 岡上汀華 小國妙子 川崎白水 橘高香流 近藤胡蝶 静一華 鷹取千豊 千蔵天空 寺本翠葉 中島大夢 名倉克彦 島穆風 坂東香璋 古瀬章石 牧野象山 松田美津子 丸山沙舟 宮野宗雄 山田青溪 山本寿法 渡辺北舟

青木雄山 浅野祥雲 井後雅堂 伊藤淨齋 内田紅楓 岡田桂舟 桼野麗琴 川田紅溪 木本研塵 嵯峨洛山 淡谷春好 多田稔里 千葉晨翠 土井純司 永野久美子 西口青咲 畑間青露 廣田佳苑 堀口秀雄 増田繁治 松竹芳翠 水野和香 村田祥鳳 山村千秋 山谷加津子 横井青蓮

秋山捷華 浅野和泉 石留之然 伊藤梅香 内田真弓 尾川雅舟 片畑仁美 北田成磊 串田一逕 坂上香艸 嶋田杏園 巽聖石 寺田和仁 得永春水 仲森蓬園 庭田露舟 原田恵苑 藤川富美恵 藤村香代子 馬景泉 松田静石 松本清苑 宮越素翠 山口敦子 山本恵子 吉田雅風

浅野江涯 浅良朱華 石原雲木 今村重圃 梅原玉翠 小川匪石 加藤正順 北野河聲 小森香苑 阪口香雪 鈴木紀山 田中翠仙 寺田濤雲 戸出九廬 中山翔石 野中紫光 坂正步 藤村香代子 馬景泉 松田静石 松本清苑 宮越素翠 山口敦子 山本恵子 吉田雅風

青木嘉代子 浅野春泉 池田蘆翠 伊藤錦汀 上松莊夢 岡上汀華 小國妙子 川崎白水 橘高香流 近藤胡蝶 静一華 鷹取千豊 千蔵天空 寺本翠葉 中島大夢 名倉克彦 島穆風 坂東香璋 古瀬章石 牧野象山 松田美津子 丸山沙舟 宮野宗雄 山田青溪 山本寿法 渡辺北舟

青木雄山 浅野祥雲 井後雅堂 伊藤淨齋 内田紅楓 岡田桂舟 桼野麗琴 川田紅溪 木本研塵 嵯峨洛山 淡谷春好 多田稔里 千葉晨翠 土井純司 永野久美子 西口青咲 畑間青露 廣田佳苑 堀口秀雄 増田繁治 松竹芳翠 水野和香 村田祥鳳 山村千秋 山谷加津子 横井青蓮

秋山捷華 浅野和泉 石留之然 伊藤梅香 内田真弓 尾川雅舟 片畑仁美 北田成磊 串田一逕 坂上香艸 嶋田杏園 巽聖石 寺田和仁 得永春水 仲森蓬園 庭田露舟 原田恵苑 藤川富美恵 藤村香代子 馬景泉 松田静石 松本清苑 宮越素翠 山口敦子 山本恵子 吉田雅風

浅野江涯 浅良朱華 石原雲木 今村重圃 梅原玉翠 小川匪石 加藤正順 北野河聲 小森香苑 阪口香雪 鈴木紀山 田中翠仙 寺田濤雲 戸出九廬 中山翔石 野中紫光 坂正步 藤村香代子 馬景泉 松田静石 松本清苑 宮越素翠 山口敦子 山本恵子 吉田雅風

青木嘉代子 浅野春泉 池田蘆翠 伊藤錦汀 上松莊夢 岡上汀華 小國妙子 川崎白水 橘高香流 近藤胡蝶 静一華 鷹取千豊 千蔵天空 寺本翠葉 中島大夢 名倉克彦 島穆風 坂東香璋 古瀬章石 牧野象山 松田美津子 丸山沙舟 宮野宗雄 山田青溪 山本寿法 渡辺北舟

青木雄山 浅野祥雲 井後雅堂 伊藤淨齋 内田紅楓 岡田桂舟 桼野麗琴 川田紅溪 木本研塵 嵯峨洛山 淡谷春好 多田稔里 千葉晨翠 土井純司 永野久美子 西口青咲 畑間青露 廣田佳苑 堀口秀雄 増田繁治 松竹芳翠 水野和香 村田祥鳳 山村千秋 山谷加津子 横井青蓮

秋山捷華 浅野和泉 石留之然 伊藤梅香 内田真弓 尾川雅舟 片畑仁美 北田成磊 串田一逕 坂上香艸 嶋田杏園 巽聖石 寺田和仁 得永春水 仲森蓬園 庭田露舟 原田恵苑 藤川富美恵 藤村香代子 馬景泉 松田静石 松本清苑 宮越素翠 山口敦子 山本恵子 吉田雅風

浅野江涯 浅良朱華 石原雲木 今村重圃 梅原玉翠 小川匪石 加藤正順 北野河聲 小森香苑 阪口香雪 鈴木紀山 田中翠仙 寺田濤雲 戸出九廬 中山翔石 野中紫光 坂正步 藤村香代子 馬景泉 松田静石 松本清苑 宮越素翠 山口敦子 山本恵子 吉田雅風

青木嘉代子 浅野春泉 池田蘆翠 伊藤錦汀 上松莊夢 岡上汀華 小國妙子 川崎白水 橘高香流 近藤胡蝶 静一華 鷹取千豊 千蔵天空 寺本翠葉 中島大夢 名倉克彦 島穆風 坂東香璋 古瀬章石 牧野象山 松田美津子 丸山沙舟 宮野宗雄 山田青溪 山本寿法 渡辺北舟

青木雄山 浅野祥雲 井後雅堂 伊藤淨齋 内田紅楓 岡田桂舟 桼野麗琴 川田紅溪 木本研塵 嵯峨洛山 淡谷春好 多田稔里 千葉晨翠 土井純司 永野久美子 西口青咲 畑間青露 廣田佳苑 堀口秀雄 増田繁治 松竹芳翠 水野和香 村田祥鳳 山村千秋 山谷加津子 横井青蓮

秋山捷華 浅野和泉 石留之然 伊藤梅香 内田真弓 尾川雅舟 片畑仁美 北田成磊 串田一逕 坂上香艸 嶋田杏園 巽聖石 寺田和仁 得永春水 仲森蓬園 庭田露舟 原田恵苑 藤川富美恵 藤村香代子 馬景泉 松田静石 松本清苑 宮越素翠 山口敦子 山本恵子 吉田雅風

浅野江涯 浅良朱華 石原雲木 今村重圃 梅原玉翠 小川匪石 加藤正順 北野河聲 小森香苑 阪口香雪 鈴木紀山 田中翠仙 寺田濤雲 戸出九廬 中山翔石 野中紫光 坂正步 藤村香代子 馬景泉 松田静石 松本清苑 宮越素翠 山口敦子 山本恵子 吉田雅風

青木嘉代子 浅野春泉 池田蘆翠 伊藤錦汀 上松莊夢 岡上汀華 小國妙子 川崎白水 橘高香流 近藤胡蝶 静一華 鷹取千豊 千蔵天空 寺本翠葉 中島大夢 名倉克彦 島穆風 坂東香璋 古瀬章石 牧野象山 松田美津子 丸山沙舟 宮野宗雄 山田青溪 山本寿法 渡辺北舟

青木雄山 浅野祥雲 井後雅堂 伊藤淨齋 内田紅楓 岡田桂舟 桼野麗琴 川田紅溪 木本研塵 嵯峨洛山 淡谷春好 多田稔里 千葉晨翠 土井純司 永野久美子 西口青咲 畑間青露 廣田佳苑 堀口秀雄 増田繁治 松竹芳翠 水野和香 村田祥鳳 山村千秋 山谷加津子 横井青蓮

秋山捷華 浅野和泉 石留之然 伊藤梅香 内田真弓 尾川雅舟 片畑仁美 北田成磊 串田一逕 坂上香艸 嶋田杏園 巽聖石 寺田和仁 得永春水 仲森蓬園 庭田露舟 原田恵苑 藤川富美恵 藤村香代子 馬景泉 松田静石 松本清苑 宮越素翠 山口敦子 山本恵子 吉田雅風

浅野江涯 浅良朱華 石原雲木 今村重圃 梅原玉翠 小川匪石 加藤正順 北野河聲 小森香苑 阪口香雪 鈴木紀山 田中翠仙 寺田濤雲 戸出九廬 中山翔石 野中紫光 坂正步 藤村香代子 馬景泉 松田静石 松本清苑 宮越素翠 山口敦子 山本恵子 吉田雅風

青木嘉代子 浅野春泉 池田蘆翠 伊藤錦汀 上松莊夢 岡上汀華 小國妙子 川崎白水 橘高香流 近藤胡蝶 静一華 鷹取千豊 千蔵天空 寺本翠葉 中島大夢 名倉克彦 島穆風 坂東香璋 古瀬章石 牧野象山 松田美津子 丸山沙舟 宮野宗雄 山田青溪 山本寿法 渡辺北舟

青木雄山 浅野祥雲 井後雅堂 伊藤淨齋 内田紅楓 岡田桂舟 桼野麗琴 川田紅溪 木本研塵 嵯峨洛山 淡谷春好 多田稔里 千葉晨翠 土井純司 永野久美子 西口青咲 畑間青露 廣田佳苑 堀口秀雄 増田繁治 松竹芳翠 水野和香 村田祥鳳 山村千秋 山谷加津子 横井青蓮

秋山捷華 浅野和泉 石留之然 伊藤梅香 内田真弓 尾川雅舟 片畑仁美 北田成磊 串田一逕 坂上香艸 嶋田杏園 巽聖石 寺田和仁 得永春水 仲森蓬園 庭田露舟 原田恵苑 藤川富美恵 藤村香代子 馬景泉 松田静石 松本清苑 宮越素翠 山口敦子 山本恵子 吉田雅風

浅野江涯 浅良朱華 石原雲木 今村重圃 梅原玉翠 小川匪石 加藤正順 北野河聲 小森香苑 阪口香雪 鈴木紀山 田中翠仙 寺田濤雲 戸出九廬 中山翔石 野中紫光 坂正步 藤村香代子 馬景泉 松田静石 松本清苑 宮越素翠 山口敦子 山本恵子 吉田雅風

青木嘉代子 浅野春泉 池田蘆翠 伊藤錦汀 上松莊夢 岡上汀華 小國妙子 川崎白水 橘高香流 近藤胡蝶 静一華 鷹取千豊 千蔵天空 寺本翠葉 中島大夢 名倉克彦 島穆風 坂東香璋 古瀬章石 牧野象山 松田美津子 丸山沙舟 宮野宗雄 山田青溪 山本寿法 渡辺北舟

青木雄山 浅野祥雲 井後雅堂 伊藤淨齋 内田紅楓 岡田桂舟 桼野麗琴 川田紅溪 木本研塵 嵯峨洛山 淡谷春好 多田稔里 千葉晨翠 土井純司 永野久美子 西口青咲 畑間青露 廣田佳苑 堀口秀雄 増田繁治 松竹芳翠 水野和香 村田祥鳳 山村千秋 山谷加津子 横井青蓮

秋山捷華 浅野和泉 石留之然 伊藤梅香 内田真弓 尾川雅舟 片畑仁美 北田成磊 串田一逕 坂上香艸 嶋田杏園 巽聖石 寺田和仁 得永春水 仲森蓬園 庭田露舟 原田恵苑 藤川富美恵 藤村香代子 馬景泉 松田静石 松本清苑 宮越素翠 山口敦子 山本恵子 吉田雅風

浅野江涯 浅良朱華 石原雲木 今村重圃 梅原玉翠 小川匪石 加藤正順 北野河聲 小森香苑 阪口香雪 鈴木紀山 田中翠仙 寺田濤雲 戸出九廬 中山翔石 野中紫光 坂正步 藤村香代子 馬景泉 松田静石 松本清苑 宮越素翠 山口敦子 山本恵子 吉田雅風

第3回 小中学生篆刻作品展 要項

- 1 参加対象 小学校・中学校の児童、生徒
- 2 出品料 無料
- 3 課題 篆刻作品とする
内容・書体自由（姓名印、肖形印も可）
- 4 出品用紙 協会指定の用紙
- 5 出品点数 1人1点（印影のみ）
展覧後の作品返却はいたしません
- 6 出品方法 指定の用紙に直接押すか、
押印して糊で貼り付ける。（コピー不可）
氏名、印文、住所、学校名、
学年（平成27年度学年）、指導者名記入のこと
- 7 締め切り 平成28年3月18日必着（下記協会宛）
- 8 表彰 参加者全員に記念品をお渡しいたします
- 9 展覧 平成28年4月20日（水）～24日（日）
兵庫県立美術館
（神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1）
第32回日本篆刻展に併催
- 10 問い合わせ・作品送付先
日本篆刻家協会事務所 「小中学生篆刻作品展係」
〒563-0032 大阪府池田市石橋2丁目2-10 牧野ビル203号
TEL 072-760-3852 FAX 072-760-3853

募 公第32回
●特別展観 会員所蔵中国硯その歴史と美
◆併催 第3回 小中学生篆刻作品展

2016年
4/20(水) ▶ 24(日)
10:00～17:00 (入館 16:30 まで)
(最終日は 16:00 終了)

兵庫県立美術館(ギャラリー棟3階)
神戸市中央区脇浜海岸通1丁目1-1
電話(078) 262-0901

主催・問い合わせ先
日本篆刻家協会
大阪府池田市石橋2丁目2-10
牧野ビル203号
電話(072) 760-3852

後援
兵庫県、兵庫県教育委員会、神戸市、神戸市教育委員会
中国駐大阪総領事館、大阪府日中友好協会
公益財団法人 兵庫県芸術文化協会

日本篆刻展

九月課題

「英気動人」

役員(尾崎蒼石選)



拓石



早知子



董圃



誠峯



汀華

常任委員(山田塘段選)



見聲



明



秀風



紳丘



静山

委員(石原豊玉選)



殷舟



管城



極浦



容史子



智香

会員(伊藤雅夫選)



はる子



勝山



楨水



景司



秋鹿

一般(熊本夕生選)



管玉



碧翠



幽篁



瑞恵



桃苑

役員(井谷五雲選)



燕安



白水



素月



繁治



董圃

常任委員(神原晴夫選)



敬次



平峰



五月



瑞邦



悦子

委員(武井岳峰選)



匠



宝樹



眞壽男



游石



登雲

会員(梶川久美子選)



散花



勝山



五岳



雅宣



三嘉

一般(長谷川帰海選)



幽篁



管玉



進



晶石



瑞恵

【役員】

川崎白水
田原良山
立石見聲
岡崎巖生
武友早知子
南敏子
今村重國
島穆風
垣内誠幸
岡田桂舟
岡上汀華
上田静雲
古野燕安
浅良朱華
木村谷庸
今西九郎
計五〇人

【常任委員】

月森康生
岡崎巖生
岡中紅珠
津田秀風
小澤博石
奥島輝丘
寄田龍神
大井智香
永野草翠
鈴木惠堂
山崎井泉
鈴木城山
計六三人

【委員】

伊谷昌子
大原誠
向山翠
森口溪石
磯村育治
小松英昭
平松清嗣
小嶋瑞碩
萬谷碧風
計六五人

【全会】

小澤一哉
鈴木智子
大野勝山
横山光子
伊神千博
上田玉雲
川崎鎮水
井上秋鹿
井畑嘉雨
武田黎
計五九人

【一般】

吉田豊
三宅洋子
大平正子
遠藤幽篁
大井義男
三井顔子
須田桃苑
板屋玉芝
宮内紅華
石場溪州
計三三人

【役員】

宮越素翠
木村谷庸
岡崎白水
藤田尚子
杉本素月
石龜西峯
増田繁治
垣内誠幸
今村重國
古瀬章石
岡上汀華
今西九郎
計四八人

【常任委員】

長谷川帰海
奥島輝丘
中松金峰
青木鐵生
梅田五月
渡邊尚石
宮本瑞邦
黒田悦子
河瀬魚仙
川久保明
岡崎巖生
高橋忠義
計六四人

【委員】

中龍孫
木谷浩三
池谷宝樹
奥島輝丘
池田敬花
藤田勉
小松五岳
中村紀久
福谷華紅
山崎遊石
山下登雲
高橋翠湖
山本杏華
計六五人

【全会】

向仲輝雄
藤田勉
青山正人
小澤一哉
中島幸國
岡本滋二
田中滋
高橋裕進
駒見華山
寺地寿和子
計五八人

【一般】

宮内紅華
木村忠男
遠藤幽篁
三宅洋子
石場溪州
板屋玉芝
大平正子
廣森勝竹
龜谷雅光
計三〇人

十月課題

「君子慎小物」

一月課題

「臭如蘭」

役員（真鍋井蛙選）



敏子



汀華



穆風



明峯



克彦

常任委員（池田泥異選）



戯石



博石



浩佳



謙之



殿舟

委員（伊佐治祥雲選）



景司



浩三



芳翠



眞壽男



清嗣

会員（石原豊玉選）



勝山



散花



幸弘



喜雨



悦治

一般（出田塘葭選）



進



管玉



勝竹



桃苑



八哥

【役員】

高野弘深
南敬子
上田静雲
岡上打華
小澤博石
奥島春冷
花房浩佳
渡邊尚石
北畑謙之
安井芳泉
高橋忠義
長谷山墨石
佐藤翠龍
永野草翠
中島敬次
計六九人

【常任委員】

葛岡慶石
大城容史子
木谷浩三
山登雲
向畑芳翠
武田繁秀
鈴木清剛
中井榮子
北岡弘子
森静二
計五七人

【委員】

木南美智子
鈴木桂峰
山下登雲
小林邦夫
武田繁秀
中井榮子
井上秋鹿
中龍孫
計五七人

【会員】

松村信夫
松浦雅宣
中本幸玉
山登雲
大崎三嘉
長沼梅風
小松五岳
寺地寿平
相川良孝
計六一人

【一般】

伏木興一
板屋玉芝
誤田石
大芦義男
三井顔了
鈴木千春
後藤英子
石田幹男
計一九人

展覧会成績

改組新第二回日展

無鑑査

井谷五雲

入選

多田龍淵 小朴園 真鍋井蛙
古溝幽畦 喜多芳邑 東尾高岳
廣田笙鶴 関踏青 稲垣華扇（新）

青燈忘詠（十二）

小朴園

「馬鹿不孤」



馬鹿不孤必有鄰

あなうなぎいづくの山のいもとせを
さかれてのちに身をこがすとは
山吹のはながみばかり金いれに
みのひとつだになきぞ悲しき

大田南畝、本名草、通称直次郎、号南畝・杏花園・巴人亭・蜀山人、狂名四方赤良は数えで十九歳で寝惚先生文集を出し文壇に登場する。その文集の序文を書いたのが風来山人・平賀源内。その最後の部分に「馬鹿不孤、必有鄰」と。ちょうど

電車の中で読んでいた小生、やつのこととで笑いをこらえたものだ。有鄰部館や無鄰庵はあれど、徳を馬鹿と言つてのける発想の転換の何と痛快なことか。かくして鄰の鄰もまた馬鹿ということで、蜀山人の周りには多くの狂歌師が集まることになる。

さて、篆刻仲間のあまり多くはないということは、我のみ馬鹿で世人皆賢人なるや、更に馬鹿に磨きをかけて大馬鹿になれば、あるいは世人も引きつけられん。馬鹿不孤、必有鄰。これに向三軒両鄰を加えたは当会の狂師であつた。

東西印人交流 「日本篆刻連盟講演会」

二月十一日、東京新宿ハロー貸会議室において、日本篆刻連盟による講演会が開催された。平成二十六年本協会常任顧問尾崎蒼石先生が、平成二十七

年井谷五雲理事長が講演を持たれた流れによるものである。

今回の講師は、真鍋井蛙副理事長と、扶桑印社代表遠藤彊先生であった。綿引滔天先生の司会のもと、河野隆先生による開会の挨拶、そして真鍋・遠藤先生の紹介があり、講演が始まった。

まず、真鍋先生は「日本の印人につ



印譜を手に取って鑑賞

談笑する真鍋(左) 遠藤(右) 両講師



いて」と題し、『最近を追っかけ調査みたいなことをしています。河西笛州の生き方を自分の年齢と照らし合

わせて聞いてください』と先生は笑いながら前置きされた。その上で、梅舒適門下として、梅先生の師、笛州先生の一生を年譜にそって話されていた。

山梨で生まれ、標兜谷に習い、戦争や何度も転居をする中、北村春歩と支那に外遊し、呉昌碩と会ったり、「浪華印社」を創設したり、関西の篆刻界の様子や当時の交流関係が明らかになった。そして、七十五歳に心臓麻痺で急逝されるまでの貴重な資料も拝見できた。笛州の刻印(珍しい材では、水晶や象牙のもの)、菅橋彦の筆による笛州とその妻の墓の文字、「亦可印存」「印萃」等の印譜。中でも、梅先生二十六歳当時の美しく小筆で書かれた履歴書が特別に展示され、注目を集めていた。

続いて、遠藤先生は「遠藤彊の篆刻」と題し、二〇項目のテーマをドンドン楽しく話していかれた。印象に残った内容は

一、指導者の言は良く聴くけど、従わなくても良い。先生が『右』と言っても、

なぜ『左』はダメなのか考えてみる。

二、印譜・拓本は発想の源。本は隅々まで読むこと。又漢印等を例に挙げ、上手な印のパターンを探る。

三、選文(作品の中の選文の重要性)ムダにいくつも作品を作らず、じっくりと選文し、印刀を持つまでの時間を長くする。

そして最後に、『作品を作っている時間は勉強していない時間で、今まで勉強してきたものを吐き出しているだけ。良い作品を作るためには、仕入れをいっぱいしておかないと、必要な事がスツと出ない』と話され、目から鱗が落ちる思いがした。

この講演会には、本協会や扶桑印社からも参加する人が数名見られた。総勢一〇〇名近い篆刻を愛する人達が、分け隔てなく並び勉強できる環境がスタートした。これからの篆刻界は、仲良くそして強くなれると確信できる交流会となった(関踏青)



特別展観された参考品に見入る

第三回 日本篆刻展 審査会開催

篆刻のみの公募展「第三回日本篆刻展」の審査会が二月二十一日、神戸市産業振興センター二階展示場で行われた。役員を除き、全国から出品された評議員、常任委員、委員、会員、公募の作品総数七七四点の審査は、審査員一六人、審査参与二人、審査係一五人により進められ、十時から審査会議が開かれ、詳細な審査運営等の確認がなされた。慎重かつ厳正な審査の結果、評議員から梅舒適賞三点、常任委員から日本篆刻展大賞一点、同準大賞八点、同優秀賞一九点、委員から奨励賞四六点、会員から特選四三三点、秀作九一点、公募から会員推薦賞四七点を選ばれた。

尚、委員奨励賞から寄託賞一点、会員特選中から四点の寄託賞が選出された。来る四月二十日（水）から二十四日（日）まで兵庫県立美術館（ギャラリ棟三階）において、特別展観「会員所蔵中国硯—その歴史と美—」、併催「第三回小中学生篆刻作品展」とともに展覧される。

（日）まで兵庫県立美術館（ギャラリ棟三階）において、

特別展観「会員所蔵中国硯—その歴史と美—」、併催

「第三回小中学生篆刻作品展」と

ともに展覧される。

審査に先立ち審査基準を協議する審査員会議



評議員作品から梅舒適賞を選考



慎重に進められる審査

●審査委員長

理事長 井谷五雲

●審査員

常任顧問 尾崎蒼石 山下方亭

顧問 市川西僊

副理事長 喜多芳邑 多田龍淵

代表理事 真鍋井蛙 中島春緑 平田蘭石

伊藤雅夫 黒田玉洲

酒居石莊 小朴圃

渡邊和琴

常務理事 石原豊玉 奥田晨生

梅舒適賞選考委員

常任顧問・理事長・副理事長 八人

大賞選考委員（準大賞・優秀賞）

常任顧問・顧問・理事長・副理事長・代表理事

十四人

主な受賞者

梅舒適賞（評議員）

庭田露舟 多田稔里 戸出九蔵

日本篆刻展大賞（常任委員）

大倉章義

日本篆刻展準大賞（常任委員）

川久保明 中野聡 宇都宮蘭雪

谷松洲 平田征男 玉村美葉

安井芳泉 山吹緑

日本篆刻展優秀賞（常任委員）

松田星泉 永野草翠 荒瀬昌園

立川美津夫 安宅霞溪 若杉彩雲

渡邊尚石 岡田恵香 河瀬魚仙

平富輝 月森康生 井分澤風

河村千紅 蒨岡慶石 長澤蘆山

細川恵苑 浅野道男 大山模華

立石見聲

今年は梅舒適先生生誕百年展のこともあり、沢山の先生の刻印を拝見することができた。池田泥異兄が一つひとつ写真にとったり、年代別に整理した。我々にとっては本当にありがたいことである。

さて、この「寿春」は面々印で、一般的印材に刻されている。刻された年代は、紙面の都合で次回にすると、印縁の全てを取り去った斬新な作である。(先生は時に、文字を辺縁から解放した作を発表された) 印影には辺縁にあたる小さな点が見られ



るが、先生の美意識やご性格からしてこの点はあまり気にしない方がよいと思う。また、印影右下方に見られる縦画は、一見辺縁のように見えるが「寿」の実画である。

印面の拡大写真を見てみよう。この縦画の上部は刻す途中で欠けたものである。「寿」の曲線部が一体となった名作は、欠けたことによつて一層この印を力オス的なものへと導いている。先生は、その魅力を我々にも伝えるべく『篆美十一号』に掲載されたのであろう。



広いロビーの巨大ビジョンの前に設置された開会式場



第二回日中篆刻芸術展「上善如水」 於 中国(広西)篆刻芸術館 十二月二十日～二月二十日

歓迎宴

開幕式前夜十九日、広西規画館内にて五時三十分から三時間、盛大なる歓迎会が行なわれた。北京から駆けつけられた駱芃芃先生をはじめ、中国全土から多くの先生方が参加された。井谷副団長等の挨拶から始まり、本交流展を運営する広西旅游発展集団有限公司の企画で少数民族のダンスや歌のステージで盛り上がり、声楽教授テノール歌手、李潮氏のソールン節、オーソレミヨは圧巻であった。

開幕式

翌二十日、中国(広西)篆刻芸術館にて九時から開幕式が行

われた。記帳を済ませ、館内中央に進むと、吹き抜けのロビーに、ステージが設置されている。パノラマビジョンに映し出された「上善如水」を背に駱芃芃先生の司会で進められる。中国芸術院副院長、呂品田先生の祝辞が始まり、尾崎理事長も挨拶をした。

上の階で開催されている展覧では、中国側は中国現代有名作家と称し、広西省の作家も含め、中国篆刻研究院の先生方、青年作家の作品、日本側は協理事以上の軸作品、寄贈の篆刻作品が印材とともに陳列されていた。

別室では日本で行われた駱芃芃先生の個展の一部の展示。デジタル化展示、ホールでは3Dで歴史や印を映し出す最新の展示方法が工夫されている。一階の五角形展示ホールも斬新である。

これらの展示は二月二十日まで常設展示され、学生たち若者も見学にきており印象的であった。

シンポジウム

同日二時から、馮宝麟・谷松章両先生の司会でシンポジウムが始まった。

尾崎理事長は、一六四四年、渡来僧二人により日本に篆刻が伝来したこと、「高芙蓉」(印聖)がその後の日本の篆刻を発展させたこと等にふれ、中国の篆刻家が日本の篆刻を理解する上で参考になることを発表された。

シンポジウムで発表する尾崎善石理事長(左)



小代表理事は、「時代を切り開く現代中国の篆刻に期待する」と題して、特に現代中国の先生方の伝統を重んじながらも新しい美を追う求める姿勢、時代を切り開こうとする強い意欲を賛美され、それは将に小先生の作品制作に対する姿勢そのものでもあると感じるものであった。

途中退席し、桂林への移動のため急いで南寧東駅に向かった。(喜多芳邑)

広い会場陳列された日本側作品(壁面)と寄贈印(ケース内)



南寧・桂林訪中旅行記

第二回日中篆刻交流展に参加のため、日本篆刻家協会は、去年十一月十八日から二十三日まで二十九人の訪中団を南寧市に派遣した。

十一月十八日

尾崎蒼石理事長を団長、井谷五雲副理事長を副団長とする「日本篆刻家協会訪中団」は、関西空港九時四〇分発、中部空港八時五十五分発に分かれて出発、現地時間十一時五十分上海浦東空港へ移動し、結団式を終えた。団は上海虹橋空港へ移動し、十五時発南寧へ向かった。十七時四〇分南寧空港に到着。十九時十分、広西南寧鳳凰賓館着。ベトナムに接する南寧まで一日がかりの移動だった。

十一月十九日

午前中、青秀山へシャトルバスで登頂。岩肌には数々の石碑、「天外云香」の扁額が掲げられた大池、「竜象塔」と呼ばれる明代に建築された展望台は南寧市全景を一望でき、一気に登ると半袖Tシャツが汗だくになった。その後バスで移動し広西民族文物苑に到着。竹楼の二階で昼食。大きな平ざるに平麺のビーフン、さつまいも、さといも、とうもろこし、ちまき、もち、鶏の手羽先煮、豚の角煮、小粒のみかん、モンキーバナナ、甘いぶぶが浮かんだ甘い油茶。手掴みで素朴に味わった。広西銅鼓博物館を見学後、如意坊古



玩城では皆でわいわい言いながらラオス石を爆買した。ラオス石は朱色のくすんだ濃淡が酔美人のようで美しい。その晩は交流展開幕前の祝賀懇親会に招かれた。

十二月二〇日



十二月二十一日

八時にホテルを出発し専用バスで漓江下りの船着場、竹港へ。いよいよ九時四〇分、年季の入った大型遊覧船で出発。昨夜の雨で川の流れも速く、船のスピードも速く、エンジン音も騒がしい。想像していた船とはちと違った。不運にも我が篆刻家協会の席が一階と二階に分かれていた。猛抗議により晴れて二階で一緒の席になり、皆でバイキングの昼食。一階船尾のデッキの青空厨房で作られたビーフン、麻婆豆腐、椎茸の揚げ物、甘い白パン…。南寧桂林では必ずビーフンが食事に出来る。屋上のデッキに上り強風で鼻水すすりながら、象鼻山、九馬

行かれた第二回日中篆刻交流展開幕式に参加。南寧紹介の3D映画鑑賞、展覧会鑑賞、シンポジウムの後、十六時三〇分に新幹線で桂林へ。中国の新幹線の駅は広くて空港のよう。持ち物チェックもあり時間がかかった。二時間半の陸路移動の夕暮れ時、夢にまで見た桂林の山々が見えてきた。田んぼでは黒水牛の姿も垣間見えた。桂林に到着後、あいにくの雨で道路は大渋滞。たいへん遅れて桂林賓館へ着き、遅めの夕食となった。



画山、神筆山、笥山、ふじりんご山と景色を追う。岩肌の黒が墨のようで、所々滝が見える。後半、二〇元札の裏面の景色があるとわかり、慌ててお札を掲げながら皆で大騒ぎしてその瞬間をカメラに収めた。約三時間経ち、山水画の景色も終盤を迎え、陽朔着。船着場から両側に長く出店が立ち並び、観光地とあって中国人も多く訪れごった返していた。ほどなくして陽朔西街へ着き、石畳の街並みを散策した。キンカン、マンゴー、卵果、龍眼といった果物を買って、皆でその場で頬張った。どれも新鮮で格別に美味しかった。バスで桂林空港へ移動し一時間三〇分遅れて十九時二〇分発の空路で上海へ。二十一時二十五分上海浦東空港に到着。バス移動の後、新錦江大酒店に着いたのは二十三

時十五分。急遽ホテル近隣のファミリールレストランで夕食を取ったのは午前〇時だった。

十二月二十二日

昨夜の疲れがやや取れぬまま、ゆっくり目の朝食を済ませ、午前中は豫園商場界限散策。骨董屋の「蔵寶楼」では一階二階と限なく回り、印材、印盒、硯、文鎮、古い絹布を求めた。電卓や筆記で値段交渉するのがとても面白い。中国語を話せなくてもやり取りできて楽しい。暇な隣の店員も参加したり、包装を手伝ったりと中国人の暖かい心に感動した。昼食後、福州路、南京路を散策。周虎臣の筆莊、朵雲軒、古籍書店、印泥屋の西冷印社へ足を運んだ。一日上海での買い物満喫し、最後の夕食時には十一月誕生日の会員は協会の先生方からのプレゼントを贈られ、喝采を浴びる。その後、上海雑技を鑑賞した。一日歩き回ったので寝てしまうかとも思いきや、とんでもない。極めつけは鉄格子の球の中を何台ものバイクが月光仮面のような姿で走り回る命懸けの演技と最後まで目が離せず、その健気さに感激し、大きな勇気をいただいた。ホテルに戻った後、この日買い求めた品物の披露やゲームをしたりして、最後の夜は更けていった。

十二月二十三日

中部空港行きの方は一足早くホテルを出発のため、八時三〇分ロビーで解団式を行い、上海浦東空港へ向かう。関西空港の者は九時三〇分ホテルを出発、呉昌碩記念館を訪れた。昼食後、上海浦東空港へ向かい、関西空港十九時着。中部空港は十七時四十四分着。定刻より二時間四〇分の遅れとなったが二十九人全員無事に帰国となり帰途に着いた。(畑間青露)

生誕 百年 梅舒適 展

来る三月二十三日(水)から二十七日(日)にかけて兵庫県立美術館ギャラリー棟三階にて日本篆刻家協会初代理事長、梅舒適先生の「生誕百年 梅舒適展」が開催される。平成二十八年は梅先生の生誕百年にあたり、この企画がもちあがった。

陳列作品は稲田(梅)家所蔵品を主に、石章百六十点、印影六十八点、書三十九点、画三十五点の総数約三百点(予定)に及び、梅先生の全貌が網羅されることになると思われる。これに合わせて、梅コレクションから厳選された日本・中国印人各二十家作品、陶磁硯十三面、古名筆十三本が陳列される。

会場は大きく六つに分けられ、第一



室には魯迅、白居易、陶淵明、呉昌碩を題材にした作品が陳列される。梅先生は多くの詩文を書画篆刻に用いられたが、特に魯迅、白居易等に傾倒されていた。一回目の日展特選作を始め、魯迅・白居易等を題材とした作品が多く残された。第一室作品の多くは現代書道二十人展出陳作であり、図らずも二十人展を懐古する形となる。

第二・三室では、展覧会出品作品が制作年代順に陳列される。作品は当時の額装のまま保管されており、

時代の変遷をも感じ取れるようになっている。二・三室をつなぐ机上では、やはり現代書道二十人展に出品された「清沈元珉書斎快事」

とこの作の制作過程で作られたと思われる、折帖に鉛筆書きの印稿が六メートルにわたり披露される。また、陳列ケースでは、壁面額作品(印影)にはない刻印が制作年代順に並べられる予定である。三室の陳列ケースに並ぶ作品は展覧会出品作とは異なり、梅先生二〇歳代の作品をはじめ、あまり目にするのではない小印が主となる。

第四・五室に書・画小品、六室に書画大作が配置される。陳列ケースには、大阪府日中友好協会冊子新年号表紙挿絵十一枚、白帝城スケッチ画、長恨歌未刻布字印十三方等の珍しい品も並べられる。また先生が使用されていた文房具等も展示される。

会期が五日間と短いのが惜しまれるが、戦後の篆刻界を牽引してきた、梅舒適という偉大な文人が醸し出す翰墨の氣に浸ることができると思われる。



■ 会 期
2016(平成28)年 3月23日(水)~27日(日)

■ 開館時間
10:00~18:00(最終日は16:00まで)
※入場は閉館の30分前まで

■ 会 場
兵庫県立美術館 ギャラリー棟 3F

お問い合わせ先 篆社
552-0021 大阪市港区 築港 3-3-609 尾崎蒼石方
TEL 06-6572-2966

生誕一八〇年記念

富岡鉄斎

―近代への架け橋―展

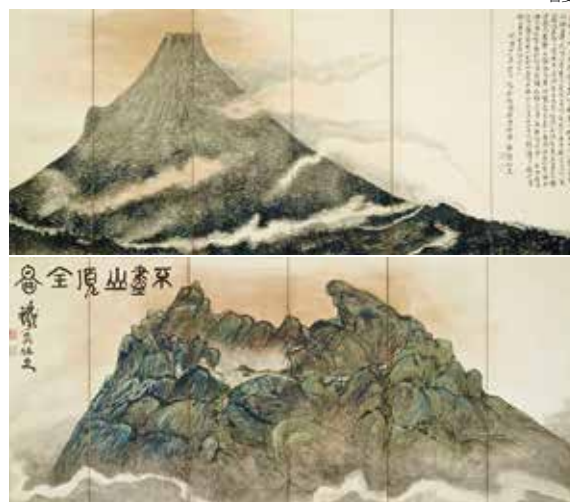
一八三六（天保七）年に京都で法衣商を営む商家に生まれ、幼少時より国学、漢学等の学問を広く修める傍ら、十九歳ごろから絵を学び始めた富岡鉄斎は、幕末の動乱期には勤皇学者として国事に奔走し、維新後は神官の公職を経て一九二四（大正十三）年に八十九歳で亡くなるまで、文人画家として多くの書画を世に送り出しました。日本全国を踏破して生み出された真景図や、文人の理想郷を描いた仙境図などの山水画、中国や日本の故事、古典に取材した人物画や神仙画、風俗画、花卉・鳥獣画など、その領域は多岐にわたり、奔放な筆致と豊かな色彩で描かれた、壮大なスケールの作品は、同時代のみならず後世においても他に例をみない傑出した存在感を放っています。終生学者を以て任じ、すべての作品に古典や実景を典拠とした賛を添え、文人画家としての理想を追求し続けた鉄斎は、後世の画家達にも大きな影響を与えました。



画室の鉄斎翁 70歳頃

展覧会では、日本美術史上に大きな足跡を残した富岡鉄斎の画業を約二〇〇点の作品で紹介するとともに、絵を賛とともに鑑賞し読み解きながら、絵画制作に貫かれていく鉄斎の世界観を探ります。展覧会の最後では、鉄斎に影響を受けた近代の画家たちによる作品と、鉄斎をめぐる言説を紹介し、富岡鉄斎の日本近代美術における位置を再考します。

右隻



《富士山図》1898年 紙本着色、六曲一双 清荒神清澄寺 鉄斎美術館蔵（前期展示） 左隻

みどころ

- 最後の文人画家とよばれる巨匠、富岡鉄斎の画業を、清荒神清澄寺・鉄斎美術館（兵庫県宝塚市）所蔵の名品を中心に、約二〇〇点の作品、資料で紹介いたします
- 鉄斎の生誕一八〇年を記念して開催。生誕一五〇年記念展（一九八五年・京都市美術館）以来、三〇年ぶりの大規模展覧！近年の富岡鉄斎展の中でも最大規模の回顧展です。
- 清荒神清澄寺が各地の美術館、博物館へ寄贈した鉄斎の名作が大集結。屏風絵は前後期併せて計十二点。壮大なスケールの鉄斎画が一堂に会します。
- 重要文化財《阿倍仲麻呂明州望月図》・円通大師具門隠栖図《辰馬考古資料館蔵》が特別出品されます。（展示期間：四月二十六日～五月八日）
- 近代の画家たちは鉄斎をどう見たか？梅原龍三郎や中川一政など、鉄斎画に影響を受けた後世の洋画家たちの作品と言葉を通して鉄斎画の魅力に迫ります。

■ 会 期 2016(平成28)年 3月12日(土)～5月8日(日)(50日間)
前期:3月12日(土)～4月10日(日) 後期:4月12日(火)～5月8日(日)

※ 前期後期で作品がほぼすべて入れ替わります。ご注意ください。

■ 開館時間 10:00～18:00 ※金・土曜日は夜間開館(20:00まで) ※入場は閉館の30分前まで

■ 会 場 兵庫県立美術館 企画展示室

■ 観 覧 料 一般¥1,300(¥1,100)、大学生¥900(¥700)、高校生・65歳以上¥650(¥550)、中学生以下無料

※ ()内は、前売料金及び20名以上の団体割引料金。 ※ 前売券は一般、大学生のみ、3月11日(金)まで販売します。 ※ 前期ご観覧の半券(招待券除く)の提示により後期は団体割引料金でご観覧いただけます。 ※ 障がいのある方とその介護の方1名は各当日料金の半額。(65歳以上をのぞく) ※ 各種割引の適用は、会期中、美術館窓口のみ。要証明。

お問い合わせ先 兵庫県立美術館

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1-1-1

代表 TEL 078-262-0901

<http://www.artm.pref.hyogo.jp>

各印社活動 トピックス

第三十回畦石舎作品展

十月三・四・五日、京都岡崎日図デザイン博物館において第三十回畦石舎作品展を開催しました。今年も三百名を超える方々が足を運んで下さいました。紙面をお借りして一言御礼申し上げます。今回は三十回を記念し、『近現代文化人の書簡』と題し、五十八名、六十一点を特別陳列致しました。書簡は書家・篆刻家のみならず画家・陶芸家・政治家・学者等々多岐に涉り、個人個人の書風の違いはもちろん、内容に合わせた書きぶりの違い、葉書や封筒に見られる時代性、便箋の選び方や使い方に見られる人間性などが比較鑑賞できたことは我々会員達にとっても大変勉強になりました。来年度も是非御高覧いただきますよう、よろしくお願い致します。(北田成磊記)



デザインとして見る篆刻の展開 不華篆会習作展××Ⅲ

「雪」をデザインして生活の中に書・篆刻・不華篆会習作展××Ⅲを平成二十七年十月三十一日から十一月一日までの二日間、伊丹市立工芸センター展示室Bで開催した。

デザインとして見る篆刻の展開をタイトルとし、今年は「雪」字をデザインして生活の中に書・篆刻——をサブテーマに、会員十九人がそれぞれオーソドックスな篆刻作品と工芸的な手法を用いた作品を出品した。

オーソドックスな篆刻作品のほか、陶芸・木工、彫金・金属、瓦・アクリル・布・紙細工、刺繍等の工芸的作品だけでなく、和装本、折本の印譜も出品されバラエティに富んだ展示になった。工芸的作品には苦心しているが、来場される方々から「毎年、楽しみにしています」との言葉に励まされ続けている。恒例となっている篆刻一日体験講習会を最終日に開催、好評を得ている。



巡回展として十一月三日から十二日まで、丹波市の兵庫県立丹波の森公苑展示ギャラリーで開催した。(S)

第十六回蒼文篆会展

第十六回蒼文篆会展を十一月二十七日・二十九日大阪美術倶楽部にて開催。梅舒適先生の特別出品、中国より賂芴芴先生、范正紅、蒯憲先生、山東印社幹部の十数名の先生の作品を御出品いただき、会員の篆刻作品、書大字作品、画作品等々を展示いたしました。机に特別陳列といたしまして貴重な戦国古陶百種、平安古筆名品等を展覧し、今後の会員が作品作りの糧に出来ればと感じました。

会期中には中国山東印社より范正紅社長、陳威光先生、李峰先生、また来賓多数の御来場いただき盛会裡に開くことができました。祝賀会は大阪シエラトン都ホテル大阪に於て多数の御来賓に御出席賜わり、明日より尾崎蒼石先生御指導の下に、第十七回展に向けて更に精進することを会員一同誓い合い、おひらきと致しました。(師子堂房翠)



第七回寧和展

十二月十日・十三日までの四日間、奈良文化会館において開催した。

代表の喜多芳邑による篆刻、隷書の書き方を実演。ワークショップとして一般の来場者に会員の指導で一字印を作成していただいた。特別展観として会員所持の梅先生作品、近現代中国作家の隷書作品を数点展示した。来場者五〇〇名弱、ワークショップ参加者は三〇名ほどであった。最終日、尾崎理事長、奥様にもご来場いただき厚くお礼申し上げます。(喜多芳邑)



第十一回 娛憚文会展

十二月十一日より十三日、兵庫県民アトリギャラリー二階の大・中・小展示室にて開催し、来場者数は延べ五百名を超えました。

井谷先生による「大学五則」「怡齋藏磚瓦硯譜」を始めとし、会員一人一人が二年間勉強してきた成果を元に制作し、着想や表現方法の異なる多彩な作品が並びました。また初めての試みとして、会員を三班に分け、それぞれの班が独自に題材選びや仕上げ方を相談して分刻作品を制作するとともに、橘高香流・寺田濤雲・西岡青淡による「凹凸三人展」を特設しました。

毎回自分の持てる能力を出し切って展覧会初日を迎えますが、陳列された自分の作品を見るといつも次の課題が見えてきます。そして、多くの皆様に見て戴いてご意見を賜る緊張感が、私たちに次へと進む意欲を与えてくれます。ご高覧下さった皆様に、心より感謝致しております。(中林千影)



第八回 篆書社游藝展

昨年十二月二十五日(金)～二十七日(日)兵庫県立美術館王子分館原田の森ギャラリーにおいて第八回 篆書社游藝展を開催致しました。

各人、書の大作一点、篆刻作品一点、分刻作品と一年の成果物としての発表となりました。発表することにより各人が新たな課題を発見するよい機会となりました。(古溝幽畦)



第二回 伍葉展

一月二十二日～二十四日、神戸元町のみなせ画廊で開催しました。今年は漢印をテーマに看板となる作品を制作し、全体で約三〇点を展示しました。来場者からはそれぞれの会派の雰囲気が出ていて面白いという言葉をいただきました。

関東からも多くの同世代の篆刻家に来場いただき、交流の場にもなりました。(井後雅堂)



第九回 中央研究会

八月六日(土)～八日(月)
舞子ビラにて開催予定

主な講義内容

① 「木印の制作」

全日本篆刻連盟の柳濤雪先生を講師に招き、木印の解説とその技法を披露していただき、研究会参加者全員が一寸角のサクラ材に一字印の制作をする。

これにより分刻印譜にする予定である。

蘭台門下のその技法を伝授、指導していただけるよい機会である。印材や刀については、協会で準備、紹介していく。

② 「硯の研究

——中国硯の歴史と美——

井谷五雲理事長による講義である。第三二回日本篆刻展の特別展観「会員所蔵中国硯」の展示内容をより詳しく分かりやすく解説。その歴史や四大名硯等を中心とした内容の講義予定である。

展覧会案内

▼生誕百年 梅舒適展

会期 三月二三日～三月二七日
会場 兵庫県立美術館 本館 ギャラリー棟

▼蒼文篆会（尾崎蒼石）

大阪・澳門篆刻交流展
— 日中の作家による篆刻・書・画 —

会期 三月三十一日～四月二日
会場 大阪産業創造館 三階マーケットプラザ
特別展観：中国戦国・秦漢時代の古銅印

▼第三回日本篆刻展

会期 四月二〇日～二四日
会場 兵庫県立美術館 本館 ギャラリー棟
特別展観：会員所蔵中国硯—その歴史と美—
併催：第三回小中学生篆刻作品展

▼随風會（山下方亭）

第三回随風會書法篆刻展
国際 中国芸術研究員中国篆刻芸術院
交流 駱凡先生と研究員生

会期 六月一日～五日
会場 京都市立美術館

報告

▼齊平篆会（真鍋井蛙）

第一八回齊平展

会期 一〇月二日～四日
会場 大阪くらしの今昔館
特別陳列：河西笛洲・近藤尺天

▼随風會（山下方亭）

第三〇回記念随風會篆刻展

— 青桐印社との交流展 —
会期 一〇月三十一日～一八日
会場 京都市立美術館

▼墨染印社（黄教奇）

第三三回書道篆刻作品展
会期 一二月一日～六日
会場 静岡市民ギャラリー

協会行事

常務理事会

二月二四日（土）
大阪市 錦城閣

海外交流

「日中篆刻家交流展」
平成二七年秋 広西省南寧

日本篆刻家協会訪中団派遣

二月一八日（水）～二三日（月）
南寧・桂林・上海

平成二八年度

理事会・総会・新年会

一月〇日（日）
大阪ベイタワーホテル

第三二回展 出品締め切り 一月末

第三二回日本篆刻展 審査会

二月二日（日）
神戸市産業振興センター（神戸ハーバーランド内）

事務所からのお知らせ

お詫び

月例作品募集（二〇一六年）六月課題に誤記がありました。お詫びして訂正します。

誤 鳥之雄雌 正 鳥之雌雄

お願い

住所・電話・姓号・その他の変更がある場合は、名簿綴込のはがきにてお早めに協会事務所に届け出てください。但し、改号、新号を付ける場合、所属印社の変更などは、六月から一〇月の間にお願いします。他の期間は事務処理の上で支障がありますので、遠慮ください。

予定

生誕百年 梅舒適展

三月二三日（水）～三月二七日（日）
兵庫県立美術館 本館 ギャラリー棟

会員名簿発行

協会パンフレット発行
三月

第三二回日本篆刻展

四月二〇日（水）～二四日（日）
兵庫県立美術館 本館 ギャラリー棟

授賞式

四月二三日（土）
ANAクラウンプラザホテル神戸

第八回日本篆刻家協会役員展

四月二九日（金）祝～六月三日（木）
古河市立篆刻美術館

第九回中央研究会

『木印の制作』
（柳濤雪先生）

『硯の研究—中国硯の歴史と美—』
（井谷五雲）

八月六日（土）～八日（月）
シーサイドホテル舞子ビラ

常務理事会

十二月三日（土）
錦城閣

お気づきのこと、ご意見など、
事務所までお寄せください。
MAIL info@n-tenkoku.jp
FAX 072-760-3853

編集後記

▽梅舒適先生が逝去されて今年八月で丸八年が経ちます。初代の後、山下方亭先生・尾崎蒼石先生そして今期井谷五雲先生が理事長に就任された時の移りを感じます。エネルギーシユな四代目に期待がかかります。

扱 会員の皆さんが待ちに待った「生誕百年梅舒適展」が記事のとおり開催されます。今年は先生の生誕百年、この機にと働きかけたのは先生の老朋友兵庫県立美術館養豊館長。企画展として大規模に開催される鉄斎展にあわせ、文人梅舒適先生を俯瞰する展覧会をするのは有意義というところとお力添えをいただき、鉄斎展会期中に同会場で開催するに至りました。会員の皆さまは元より沢山の方々にお運びいただき初代理事長の文人の世界を味わっていただきたいと思います。

▽インフルエンザ（A型、A香港型）が猛威をふるっています。一月下旬の大寒波以後、情報メールサービスより各学校の学級閉鎖通知が日々はいつて来ます。ご多分に漏れず当協会も高齢者社会、くれぐれもこまめな手洗いやうがい、励行で自衛策をなさって、春の展覧会行事では、元気なお顔を拝見させていただけることを願っております。（木村容庫）

編集・会報部

酒屋石荘 木村容庫
内田真弓 戸出九蔵